

No.150

モラロジー 道徳教育

～知徳一体の教育をめざして～

- ◎モラロジーの教育観から捉えた道徳授業のあり方⑧「井の中教材と大海教材 その扱い方のポイント」 野口芳宏
- ◎脳の発達段階と道徳教育③「児童期」 高橋史朗
- ◎「いじめ問題」への対応を意識した授業づくり 広中忠昭
- ◎平成29年度教育者対象モラロジー研修会から
- ◎実践報告「年間40時間、ビタ1時間たりとも欠かさない道徳教育の実践」で学校が変わった 桑原義明
- ◎第55回教育者研究会開催予定

編集・発行 公益財団法人モラロジー研究所
生涯学習本部 道徳教育推進課

〒277-8654 千葉県柏市光ヶ丘2丁目1番1号
電話 04-7173-3219 ファックス 04-7176-1177



子供の声を聞こう

皇學館大学特命教授・三重県道徳教育推進委員会委員長 深草 正博

いよいよこの四月から、教科書を使った道徳教育がスタートする。現場ではおそらく期待よりも不安が大きいと推測する。三重県の推進委員会でもこれまで幾度も道徳教育の在り方をめぐって、議論を積み重ねてきた。その委員の中からも「四月から大丈夫なのか」という心配の声が上がっている。ところで、現場では、教科書を使うことになる特定の価値観を押しつけてしまうことにならないかという懸念がある。もとより、文科省はそれとは全く逆に、「考え、議論する道徳」を提唱している。が、具体的にはどうすればよいのだろうか。

ある小学校で三年生の道徳の授業を見せてもらった。「友だちっていいな」という主題のもとに、先生と子供たちの間で話し合いが進められた。三年生にしてはよくこれだけの意見が言えるものだと感心した。日頃の先生の教育の賜物であろう。授業は、いつも宿題を忘れると見せてくれる子が、今回は見せなかったことについて、なぜだろうかを考えるところで議論の山場を迎えた。「よく宿題を

忘れるから、いつも見せてあげると本人のためにならない」「宿題は自分でやるものだということを教えたかった」など、さまざま意見が出た。こうした授業は今後の一つの参考になるであろう。まさに「考え、議論する道徳」のモデルともなるものだからである。

このような議論の中、ある子が、「そんなのいじわるじゃない」と言った。私はハッとした。先生はどんな反応を示すだろうか。ところがその意見は取り上げられなかった。おそらく先生の頭の中には、「友だちのことをよく知り、思いやり、助け合うことで、よい友だち関係をつくっていくようにしていくことが大切である」というシナリオがあったためであろう。もし取り上げていけばいじめの問題にも発展したかもしれないと惜しまれた。大切なのは議論のプロセスであり、必ずしもシナリオ通りでなくてもよい。もともと子供の声を聞こう。そこには必ずや問題の本質に迫るものがあるはずだ。これからの道徳の授業では、この教師の聞く耳が試されることとなる。